

とは異なり、本物に触れることなくレプリカを作成することが可能です。本物の汚損のリスク回避や、保存の必要がある国宝や重要文化財、信仰の対象物である仏像など直接接触することが難しい資料のレプリカ作成方法においては極めて有効です。

5) 復元としてのレプリカ

考古学における資料や骨は土の中から発見されるため、部分や破片であり元の形が残っていることは少なく、さらに有機物はほとんど残りません。そのため、本来どういった姿をしていたのかをイメージする難しさがあります。しかし、発見された資料の特徴から本来の姿を復元する方法があります。顔の骨の特徴から、肉付けをしていき復元する「複顔」の技術により復元された鳴神貝塚(鳴神IV遺跡)の縄文美人、さらに、その技術を応用して発掘された全身骨格から復元された弥生犬が、復元としてのレプリカになります。



断面を360度回転展開したもののコンピュータ上で復元された佐波理鏡(3Dプリンター:かつらぎ町教育委員会提供)



復元のもとになった弥生犬の骨格(復元:(公財)大阪府文化財センター提供)

6) 記録としてのレプリカ

“考古学の父”である濱田耕作は、遺物に対する保存の方法として、レプリカの有効性を説いています。平成20年の熊野参詣道中辺路の牛馬童子像の頭部が切断されるという事件が起こった際には、頭部の復元に型取りし複製されたレプリカを用いて復元が行われました。精巧に作成されたレプリカはその記録としての精度も高く、高精細レプリカは、注目されています。



レプリカをもとに修復された牛馬童子像(左:き損前・右:修復後 田辺市教育委員会提供)

おわりに

私たちの生活の周りには、フェイクはたくさんあります。偽物、まやかし、欺く…決していい意味で使われるわけではありません。

しかし、博物館や考古学では、レプリカや複製品など、「本物ではないもの」=フェイクも多く活用されており、私たちが資料や展示、歴史を理解する上で有効な手段でもあります。そして、それらを、「なぜ作ったのか」という目的もそれぞれ異なります。

フェイクという言葉が、必ずしも正しいとはいえませんが、この展示が「なぜ作るのか」、「どのように作ったのか」という、考古学におけるフェイクの世界を知るきっかけとなれば幸いです。

和歌山県立
紀伊風土記の丘

和歌山市岩橋 1411 TEL 073-471-6123
HP/www.kiifudoki.wakayama-c.ed.jp



和歌山フェイクアワード

2024

7/13 Sat

9/8 Sun

考古学におけるフェイクの世界

はじめに

“フェイク”=「本物ではないもの」と定義すると、考古資料には様々なフェイクが認められます。偽物、贋作、模倣品から模造品、模型、レプリカといった種類まであり、それぞれのフェイクの持つ意味も異なります。本展示では様々なフェイクや関連する実物を展示し、広くフェイクの世界の意味を考えていただくことにしました。さらに、本展示では参加型展示の試みとして皆さまの投票をもとに優れたフェイクを選び、和歌山フェイクアワードを決定します。

第1章 フェイクの歴史-人はなぜフェイクを作るのか-

考古資料には様々なフェイクが認められます。祭祀における模造品、産業における模倣品、骨董的価値における贋作、そして学校教材、博物館展示におけるレプリカがあります。なぜ人はフェイクを作るのか、その製作に関わる背景と技術を紹介します。

1) 祭祀と模造品

フェイクの始まりは、文字のない時代にさかのぼります。当初は個人や集団の繁栄や安寧を祈り、災厄を取り除くことを目的として、カミへの捧げものや祈りの道具として用いられました。これらは、本物とは異なる素材や大きさで作られた“フェイク”=模造品として作られました。古墳時代には、剣、鏡、勾玉といった道具を滑石と呼ばれる石や鹿の角などの加工しやすい素材でまねた「模造品」が作られました。

2) 模倣の産業

江戸時代以後、経済が発達するにつれて、各地で産業が発展しました。陶磁器は、中国で作られたものが輸入されました。室町時代から戦国時代の日本でも中国陶磁器の模倣が行われましたが、純白の素地を作る技術はなく、白

ほんもの
本物



フェイク

- 模造品
- 模倣品
- レプリカ
- 贋作
- 模型
- 偽物
- 複製品

製作技法

- 模造: 本物の観察等に基づき、作成したもの。また一部制作も含む。
- 型取り: 本物から型を作成したもの。
- 剥ぎ取り: 土層や遺構の表面を剥ぎ取り作成したもの。
- 三次元計測: 三次元計測により取得した情報をもとに、3Dプリンター等を用いて作成したもの。
- 復元: 実物資料の観察・考証に基づき、本来の姿を復元したもの。

本展示におけるフェイクの定義と技法



鳥を形どった鳥形土器(模造:大日山I遺跡)



模倣の対象となった中国産磁器染付(本物:根来寺遺跡出土)

や青や緑の釉^{うわぐすり}をうまく発色させることができませんでした。しかし、江戸時代になると陶磁器生産が急速に日本国内に広がり、各地で作られました。現在では「パクリ」や「産地偽装^{さんちぎそう}」かもしれませんが、当時はれっきとした産業でした。“フェイク”=模倣品への価値観も今と昔では少し異なります。

3) 横行する贋作づくり

江戸時代の終わりから明治時代には、古い時代の資料を好んで収集する流行りとともに、骨董的価値を追求した“フェイク”=贋作が作られ始めました。中には専門家も判別が付きにくい精巧な贋作も存在します。贋作には、図録等に掲載された作品の正確な「模造」、一部欠けのあるものに巧妙な補修を加えて完形品に見せた「補修」、土や錆、古色などを付けて土の中から発掘されたように見せかけた「補彩^{ほさい}」など、あらゆる方法が用いられています。しかし、専門家の目や最新科学の力にかかれば、真偽は一目瞭然です。



圭頭大刀 伝岩橋千塚古墳群
(模造：本物に後から部品が取り付け補修されていた)

4) 学校教材としてのレプリカ

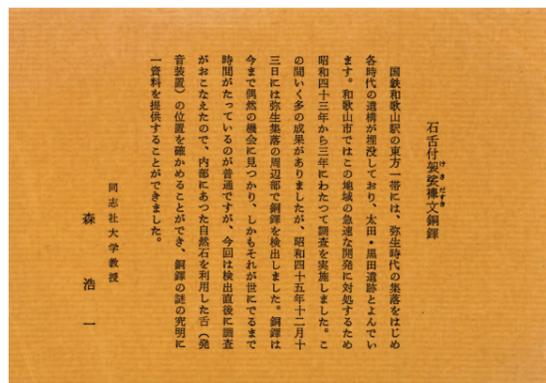
考古資料における“フェイク”=レプリカの作成は、明治・大正時代までさかのぼります。“考古学の父”と呼べる濱田耕作は、立体物である考古資料は3次元（3 dimensions=3D）でなければその説明は困難であるとして、考古学の研究・保存・普及におけるレプリカ・模型の必要性を説きました。その後、考古学のレプリカ作成は盛んに行われ、郷土教育運動の高まりを受け学校教材として購入、展示が行われました。県内の一部の学校には郷土室や社会科準備室が現在も存在し、郷土資料とともに模型やレプリカが残されています。このうち、13の小学校や機関では、考古学者森浩一^{もりこういち}が関わったとみられる太田・黒田遺跡出土銅鐸^{どうたく}のレプリカである兄弟銅鐸が確認されました。



和歌山県師範学校旧蔵考古資料模型、いずれも「株式会社島津製作所標本部」のラベルがある
(模造：右から双鳳環頭大刀、鍬形石、車輪石、陶棺の模造、和歌山大学蔵)



太田・黒田遺跡銅鐸レプリカ
(型取り：当館蔵)



銅鐸レプリカとともに保管されていた説明文
(和歌山市立名草小学校蔵)

第2章 博物館におけるフェイク-レプリカは本物を超えられるか-

博物館では、本物を展示できない制約が存在します。資料の保存、収集の難しさ、見学者の理解などの課題が挙げられ、その解決策として“フェイク”=レプリカが用いられました。また、レプリカは展示を説明するための資料でもあります。ここでは、本物を超えようとする人類の英知とも呼べるレプリカの数々を紹介します。

1) 模造によるレプリカ

レプリカの製作方法で最も古くから用いられている方法は、本物の観察にもとづいて写した模造（見とり模造）です。合成樹脂や石膏などの造形素材を用いた方法が一般的ですが、土器であれば粘土、鉄製品であれば鉄などの同じ素材を用いても作られます。色彩はアクリル絵の具や樹脂を吹き付けるなどの方法が用いられており、古さや質感を出すための工夫なども随所に認められます。製作者の詳細な観察と熟練のテクニックにより作られた模造のレプリカは芸術作品といえます。

2) 剥ぎ取りによるレプリカ

剥ぎ取りは、発掘調査で発見された土層（地層）の記録のために行われた方法で、地層断面に薬剤を塗布し、裏打ちして接着した後、地層の表面ごと剥ぎ取ります。その後、剥ぎ取り面を転写し、表面を保存処理することで地層を保存し、展示することができます。この方法を応用すれば、遺構（竪穴住居や柱穴など）の凹凸そのものすべてを立体的に剥ぎ取り、遺構のレプリカを作成することが可能です。遺構や地層（土層）に直接接触することができる資料のレプリカ作成方法であり、本物と寸分違わない精度で土を剥ぎ取ることができるため、発掘調査では有効な保存方法です。



大谷古墳馬首 展示品は新旧のレプリカ
(模造：原品は文化庁蔵、和歌山市保管)

3) 型取りによるレプリカ

型取りは錫箔（錫を薄く伸ばした膜）で資料を養生し、シリコンゴムを使用して凹凸を反転させた型を作成します。その後、型に合成樹脂を用いて、成形品を作成します。さらに実物資料を見ながら成形品の修正を行い、絵具で彩色して完成します。型取りは考古資料において現在、主流を占めるレプリカ作成方法であり、本物の大きさ、形、凹凸すべてを忠実に表現する精度は、世界に誇ることができる技術といえます。

4) 3Dプリンターによるレプリカ

近年、三次元計測機を用いて本物から計測した三次元データをもとに、3Dプリンター等（樹脂を積層または切削、場合によってはさらに型取りを行う）で出力し、レプリカを作成する方法が発達しています。三次元計測機を用いたレーザーで計測するため、型取り



半地下式倉庫遺構のレプリカ
(剥ぎ取り：根来寺遺跡展示施設)



型を用いた型取りレプリカの製作
(型取り：株式会社スタジオ 33 提供)